

20110401



ホーム

CPDN19

干

ぼくは郵便配達人。

小さな港町の、小さな郵便局。

担当区域は三丁目から岬まで。

赤くて重い郵便自転車が、ぼくの足だ。

干

岬にはゴーレム製作所があつて、わりと遠

い。道も悪いし。でも、新人はみんな岬をや

ることになつてる。そういう決まり。

干

雨つづきで道がぬかるんです。

今朝、岬の製作所に小包を配達した。その

途中、溶けたゴーレムを見つけた。

道ばたに横たわつてた。泥のなかに。

白い泥。

コットンのワンピースを着てた。生地がす

こし黄ばんでた。靴は履いてなかった。

干

ゴーレムは、人間には過酷すぎる環境で作業をおこなう労働人形。

ご存知でしょ。

あなたたちが作ったんだ。

＝

ゴーレムの材料。この地方特産の白粘土。それを重合水でじっくり練り上げてつくれる。使い捨てで、強くて、賢くて、壊れたら泥にもどる。どの個体も、うつくしい少年少女のすがたをしている。

＝

そのゴーレムもうつくしかつた。顔の半分と、肩と、右半身しか残ってなかつたけど。

軍手をはめた手で、白い泥のなかに浸かっている少女の右腕にふれた。冷たくて、しつとりしてる。粘土の手触り。持ち上げてみた。泥がねばって、にちにちと音をたてる。肘から先が溶けてなくなってる。断面は白くとろけてる。ぼくはゴーレムの腕をそつと泥濁にもどす。

製作所に知らせたほうがいいのかなあ、って思った。

郵便自転車のスタンドを蹴り上げると、白い泥が制服に跳ねた。ペダルを踏みこむ。重い。岬の上は風がつよい。

二

岬の製作所は白いタイル貼りの建物で、人の気配があんまりない。

受付で呼び鈴を何度も鳴らす。

見慣れない娘が出てきた。とても色の白い娘で、ぼくより少しだけ背がたかい。たぶん

年上だとおもう。分けた前髪をピンで留めていて、ひびわれたブーツと泥はねのあるジーンズ、白くて目の粗いニットを着ている。

小包を渡したあと、道で溶けているゴーレムの話をした。

「案内して」と娘は言った。

一緒に道を戻った。娘は手押し車を押していった。

途中で海霧が出てきて、視界がなくなつてすこし迷った。それから見つけた。ゴーレムはさつきとかわらないように見えた。

「なんで溶けるの」

娘は返事をしないで、溶けたゴーレムのか

けらを、素手でひろいつづける。手押し車に積まれたゴーレムの顔を見ていると、娘にほんとうによく似てた。

干

ときどき港町によその漁船がやってくる。

だいたい東からくる。つねに避難民を満載してる。避難民のなかに、ひどく色白でうつくしい若者たちがまじることがあるけど、彼らをゴーレムだという者は誰もいない。

漁船はきまつて重合水の入ったポリタンクを港においてゆく。そのポリタンクはいつも

ぼくが郵便自転車の荷台にくくりつけ、岬の製作所まで運ぶ。

干

たまにゴーレムを出荷するトラックとすれちがう。荷台には白い服を着たゴーレムたちが山積みされている。丸太のように、針金で束ねてある。男も女もおかまいなし。理由はわからないけど、靴を履かせてあるのと履いてないのがいるから、トラックの後ろから見たら不揃いもいいところ。

港の小さな貨物駅に列車がやってくると、

ゴーレムは無蓋車に積まれ、オリーブ色のビニールシートをかぶせられてどこかへ運ばれてゆく。

〒

最近、製作所の娘をよく町で見る。

漁船でやってきた色白の若者たちと話したり、何かを手渡したりしてる。ぼくが娘に近づこうとすると、いつもうまく避けられる。

〒

すこし大きな漁船団が東からやってきて、町に避難民があふれた。

その晩は激しい雨が降った。

朝、配達で町を回っていると、無数のゴーレムのかけらが街路に散らばっているのを見た。みんなぬかるんで、溶けてた。岬から娘によく似た若者たちがやってきて、いろんな大きさのかけらを黙々とひろい、手押し車に積んでいった。

〒

非番の日、埠頭の近くであの娘に会った。

娘はぼくを避けて、立ち去ろうとした。

ぼくは娘の腕をつかみ、「教えてよ」と言  
った。

娘の腕は柔らかかった。粘土なんかとはぜ  
んぜん違う、女の子のすべすべした肌だった。

「教えてよ。なにが起きているのか知りたい  
んだ」

娘はぼくの日をかなり長いあいだ見つめて  
いる。それから手をのべて、腕をつかんでい  
るぼくの指を一本一本はずし、むこうへ行っ  
てしまう。

彼女の指の力づよさに、ぼくは慄然とする。

干

大きめの漁船団の到来がつづく。

重合水のポリタンクの数がどつと増えたの  
で、まとめて軽トラックが運んでくれるよう  
になった。うれしい。でもこうなったらこう  
なったで、たくさんの封書や書留を製作所へ  
運ばないといけなくなつて、忙しい。

岬の製作所は大増築がはじまっている。避  
難民がたくさん働いている。クレーンとかが  
いっぱい立ってる。それは港の反対側からで  
も見える。

ぼくは自転車を走らせる。ラジオでやってた歌を適当にうたいながら、キャベツ畑のあいだを走る。あの娘と会う機会が増えたから、うれしい。

二

港に人の行き来が増え、うわさ話のバリエーションが豊かになった。大洋のむこうで起こったという災厄のうわさが町にひろまる。適切に管理されなかったバケツ一杯ほどの重合水が、どこかの川に流れ出したのだ」

「重合水分子の連鎖反応はきわめてゆるやか

に進む」

「しかしたったひとつの重合水分子だけでもそれに触れたふつうの水分子を粘度の高い水ガラスのようにしてしまい、けっして後戻りはしない」

「けっして後戻りはしないのだ」

あなたたちがその災厄を起こしたのは、もう何十年かむかしのことだという。

いまでは三つの大陸の岸边と大洋の四分の一が、上等の仔牛肉をつかったアスピックのようにぷるぷるに凝固してしまっているという。

そうしていつか、すべての水がぷるぷるぜ



リーになって、ぼくらの身体のなかの水もふるふるゼリーになって、ぼくらはアスピックになって、ぼくらは全員死んでしまう。

本当なのかな。

本当だとして、いきなりそんなこと知らされてもどうしようもないよね。

干

海霧が肌寒い昼下がりに。

ぼくはあの娘のことと、三大陸の岸辺のことを考えている。考えながら、郵便自転車でキャベツ畑のまんなかを走っている。

重合水のポリタンクを満載したトラックがぼくを追い抜いてゆく。

そのとき道路のわだちにトラックが弾み、しつかり固縛されてなかったポリタンクがひとつ転げ落ちる。転がり、横倒しになり、キヤップがはじけとび、ゼリーのような中身がどろりとこぼれでて、にぎり水をたたえた道路脇の用水に、ぼたつと落ちる。

ぼくは自転車を飛び降りる。

走り寄り、そのポリタンクを立て直す。そして腹這いになって用水をのぞきこむ。

あきらかに不自然に膨張している、こぶし大の、白くにごった水塊が見える。

ぼくは自転車を走らせる。製作所へ。あの娘のそこ。死んでもいい。生涯最速で。ぜったい間に合わせる。

干

どうして娘に知らせるべきだと思ったのか？

わからないよそんなこと。

娘はぼくと同じような姿勢で用水をのぞきこむと、さつと手をつつこんで、林檎くらいの大きさの水塊をとりだした。てらてらとぬめる、もったりしたゼリーのカタマリ。アスピックのもと。ほろびの種。

こんなふつうなものが原因なんだ、とぼくは思う。

娘は水塊を撫でるようになだめるように丸めこむ。素手でくるりとつつみこむ。真っ白で綺麗な手のひらのなかに押しつつんでしまふ。

別になにかを詠唱したり、召還したりしたわけじゃない。でも水塊はみるみる小さくなってゆく。手のひらのなかで、どんどん小さくなってゆく。指のすきまからこぼれおちたりしない。ただ、彼女の手のなかで縮んでいく。

彼女は真剣だ。きゅつと両手を揉みしぼり、

世界を修復し終わると、はりつめていた息を吐いた。ものすごく疲れた人のためいきをついた。

「終わったの？」

ぼくの言葉に彼女はうなづく。

そうして「知らせてくれて、ありがとう」

と低い声で言つて、すこし笑う。

干

わが町のゴーレム産業は、すでにその絶頂期を過ぎてしまったようだ。

ゴーレムの出荷がだんだん減ってきて、よ

その漁船の来航もまた前のようにぽつぽつとしたペースに戻る。

岬の製作所にいく用事があまりなくなり、ぼくは彼女の顔が見たくてたまらない。あれから一度も会ってない。

干

非番の日の朝、ぼくは自転車で岬へ出かける。大雨のあとで道はぬかるんでいる。キャベツ畑。白い泥。

製作所はもうずいぶんがらんとしている。

彼女によく似た顔の青年が出てきて、あの子

はもういないという。どこへ行ったのか聞いても教えてくれない。

ぼくは自転車に乗って町へ帰る。そして郵便自転車の私的使用の件で局長におこられる。

干

しばらくして岬の製作所が閉鎖される。最後のゴーレムが出荷される。大きな船が西からやってきて、製作所の設備をぜんぶ積んでいつてしまった。

「重合水塊に対する防衛線が前進したのだ」とあなたたちは言うけど、よくわからない。

最後まで製作所に詰めていた色白の若者たちも、その船でどこかにいつてしまった。

干

ごくまれに彼らのひとりが港を訪れることがある。やっぱりその顔が娘にとってもよく似ている。ぼくはあの日の娘の笑顔をそこに重ね合わせてみたりする。

あなたたちにお尋ねしたい。

そのとき、ぼくがじっさいに見ているのは、どこの、誰の顔なんだろうか。(終)